

## 川口半平の生活綴方的教育観の検討

豊田 ひさき

### 要 約

岐阜県旧徳山村に生まれた川口半平は、地元部落の代用教員から県師範学校に進み、21歳で徳山尋常小学校の正規教員になる。文学青年であった川口は、新任時代から綴方教育に関心を持ち、大和尋常高等小学校に転任してからは綴方主任を務め、『岐阜県教育』に論文を投稿するようになる。県師範の同期生の野村芳兵衛等による『綴方生活』が発刊されて間もなく神田で開催された「新綴方研究講習会」で研究発表をして全国デビューする。発表の趣旨は、子どもの綴方は『赤い鳥』に掲載されるようなエリートの綴方ではなく、①「生活から生まれる言葉」で綴られる「生活綴方」、②個人的な観照に止まらず、クラスの全員が参画できる子ども大衆の生活綴方、③身の回りの社会に対して批判的な観方ができる生活綴方であること。しかも、鈴木道太が言う「北方性綴方」だけでなく、日本全国の農村の綴方であり、平野婦美子が実践した都市労働者の子どもの綴方であり、東井義雄が実践した4年生になっても自分の名前すら書けない子どもをも切り捨てない生活綴方的教育方法と内実に於いて同質であること、つまり、実質においても全国デビューしたことを明らかにした。

### キーワード

川口半平 生活綴方 生活指導 科学的態度

### はじめに

川口半平(1897-1990)は、小学校教員時代一貫して生活綴方教育を中核にした教育に取り組んだ岐阜県の教育者。本稿では、川口が生活綴方的教育観を徳山尋常小学校戸入(とにゅう)分校での代用教員以降如何にして確立していったのかを、考察する。

川口に関する主な参考著書・論文資料としては、自著『生活共感綴方指導の新路』(1930)、『生活開発と綴方教育』(1933)、『作文教育変遷史』(1958)、『山のコボたち』(1963)、『母は子の心に灯をともし』(1967)、『花ぐるみ』(1974)と『綴方生活』等に掲載

された諸論文の他、岸武雄『芳兵衛さと半平さ』(1992)、高橋弘(1999、2000、2001)「昭和前期における岐阜県の綴方教育(一)、(二)」『岐阜綴方人』に集った同人たち一昭和十年代前半の岐阜県の綴方教育一、浮田真弓(2002)「岐阜県の綴方教育研究一川口半平を中心とした考察一」等がある<sup>1</sup>。高橋の3論文は、丁寧な聞き取りも含めた精緻な考察だが、言及範囲の大部分が県内に限られ、国語教育の一分野としての綴方教育に焦点化され過ぎている感がぬぐい切れない。

本稿では、便宜的に時代を2期に分ける。第一期は戸入分校の代用教員時代から、1929(昭和4)年12月、『綴方生活』同人主催

で開催された「新綴方研究講習会」で、川口(等)が講師陣を驚愕させるような鮮烈な全国デビューとなる研究発表(「自己の紛失」)をする。翌 1930(昭和 5)年 6 月には処女作『生活共感綴方指導の新路』を東京の寶文館から出版。地方師範卒の訓導が東京の出版社から本を出すことはまだめづらしい時代であった。さらに 8 月に岐阜市で開催された「新興綴方講習会」では、川口は執行副委員長として会をリードし、北海道から九州まで全国からの参加者が 800 名を超える会を成功させる。この頃の綴方教育を川口は、「(鈴木)三重吉の直面叙写はもう過去のものとして、如何にして生活させるかという生活綴方の方向(新時代)へ、急速に傾いていった」とハッキリと「生活綴方(新時代)」への転換と記している<sup>2</sup>。川口が生活綴方教師としての立ち位置を確立した証拠である。

第二期は、岐阜の「新興綴方講習会」を全国規模生活綴方研究集会の第一回目とすれば、戦後 1952(昭和 27)年、岐阜県中津川市で開催された第一回作文教育全国協議会<sup>3</sup>で全国から集まった 1300 余名の参加者を前に、県教育長として挨拶に立った川口が「作文教育の盛んなる時こそ、本当のことが行われるときである。作文教育がダメになる時は、教育がこのましからぬ方向に進む危機の時である」と喝破したことに象徴されるように生活綴方教育観が強固化されていく過程まで、実際には岐阜市長良国民学校長(代用附属)を辞任する 1946(昭和 21)年 3 月までに、分析のメスを入れる<sup>4</sup>。まとめとして、川口が取り組んだ生活綴方教育の仕事在全国の生活綴方教育運動の中に位置づけ、整理し直すことを試みる。

## I.全国デビューまで

川口半平は、村全体が徳山ダムに沈んだ岐阜県揖斐郡旧徳山村で、戸数わずか 50 戸程の戸入部落の農家に次男として生まれる。父は、区長や村会議員として部落や村の世話役を引き受けていた。川口が生まれて物心がつく前に長兄は死亡。姉も彼が 4 歳の時に他家に嫁ぎ、家族は川口を含めた親子 3 人。彼は、一人っ子のような形で幼少時代を過ごす。

彼が入学した戸入分校は、全校児童 30 数名。入学時の分校は、民家の空き家を借りたもので運動場もない、ノートや鉛筆もなく、石盤に石筆で字を書くという状況であった。2 年生の時に、新校舎が建ち運動場も造られるが、それは 1 教室に教員住宅の付いた小さなもの—いわゆる単級学校。5 年生の冬、腎臓病で大垣市の病院に長期入院。翌年の 3 月末に退院した後も、病後という理由で学校へはあまり行かず、家で講談本等を読み漁る。彼が述懐しているように、彼自身もそして両親も分校教員をあまり信用していなかった。

15 歳になった時、分校教員が村を去り、代理として川口が分校代用教員になる。岐阜県師範学校の入学試験に小学校卒の証明が必要になり、本校の徳山小学校長に要請するが、彼には卒業証書が発行されていないことが判明。「まあええわ、ないしよで作ってやるわ」と校長が便宜を図ってくれる。もう一つのエピソードは、代用教員になって彼が一番困ったことは、昨日まで「ペイヤ」呼ばれて一緒に遊んでいた部落の子どもに対して、先ず先生としての「威厳」(＝分校で彼を「ペイヤ…」と呼ばず「ハンペイ

先生」と呼んでくれるようにする)を示すことができないことであった。この時彼が採った奥の手は、代用教員になるまでにため込んでいた「講談風のお話し」等を「授業時間きちんと勉強したら、後で褒美として先生がお話をしてやる」という形で、活用することであった。

そんな彼の読書傾向は、腎臓病で退院して以来11～12歳頃読み漁っていた講談物から、代用教員時代には、尾崎紅葉、徳富蘆花、島崎藤村等の小説に夢中になり、『正則中学講義録』や『少年世界』に移っていく。代用教員では将来が不安と母に勧められ、彼は受験勉強に励み、17歳で岐阜県師範学校に入学。同期生に、野村芳兵衛がいる。川口同様、野村も農家の出で地元の高等小学校卒業後、代用教員を経て師範学校へ入学している<sup>5</sup>。

本格的な勉強を期待して入学した憧れの師範学校は、川口にとってはあまり面白くなかった。全寮制での先輩・後輩の上下関係の厳しさと期待外れの授業に相当うんざりさせられたらしい。嫌いであった教練の授業を欠席していると、そこに同じく仮病を使って欠席する野村が居り、二人は意気投合して文学談議に花を咲かせる。かくして師範では、授業よりも文学にのめり込み、『中央公論』に載った中條百合子(宮本百合子)の「貧しき人々の群」等に感動する多感な文学青年になる。「後まで深い感銘を残した書」として川口は、明治社会主義文学の代表作である木下尚江の反戦小説「火の柱」を挙げている<sup>④</sup>。

彼は師範時代を振り返って、「師範学校1年生の時、(国語教師に彼の作文に対して)『絶賛に近い評を長々と記されていたこと

で文章に対して何か自信らしいものが生まれた』…だから2年生になって(漢文教師から)『俗語多ク、莊重味ヲ缺ク』と評されても『先生の評によって容易にたじろがない』と記している<sup>6</sup>。生活綴方への助走が既に始まっていた一つの証拠である<sup>⑤</sup>。その他、師範で生活綴方教師への助走が始まっていた証としては、彼(そして野村)にとって、一番影響を受けた教師が師範学校という枠にとられない器の大きな博物の猫山常蔵の師範生に対する「生活指導面」での対応であった<sup>⑥</sup>、と後日語っていることが挙げられる。

1918(大正7)年21歳で師範学校を卒業した彼は、郷里の徳山尋常小学校訓導を命ぜられ5・6年の複式学級を受け持つ。この時、徳山小学校は、校長と彼だけが教員免許を持つ正規教員で、後本校の1名と5分校の各1名は全て代用教員であった。赴任早々骨髄炎で大垣の病院に入院、手術を受ける。6月頃退院するが、村には医者が居ず毎朝自分でガーゼを交換し、杖をついて学校に通う。この頃、綴方教育に関心を持つようになる。11月になると青年のための夜学が始まり、まだ痛む足を引きずりながら彼は夜学教師も勤める—ここにも生活綴方教師になっていく片鱗が窺える<sup>⑦</sup>。

1921(大正10)年、川口は揖斐郡の大和尋常高等小学校(現揖斐川町立大和小学校)へ転任。大和小学校は、尋常科6学級、複式の高等科1学級からなる小規模校。綴方主任として6年担当の彼は、この年、『岐阜県教育』に「童謡について」を発表<sup>7</sup>。大和小に転任して2年目、師範附属の訓導や郡視学も参加する研究会が大和小で開かれる。3年生の修身(教材「師をうやまえ」)の事後批評会で、川口は「教師が自分から『師をうや

まえ』なんて壇上から説くのは、おかしい」  
「この教材は不適當」云々と発言する。彼の  
発言に対し郡視学が最後に「教師である限  
り、絶対に教科書の精神を大切に、私見  
をさしはさむべきではない」という断を下  
してその批評会は閉じられる<sup>8</sup>。翌 1923(大  
正 12)年『岐阜県教育』に「童謡教育」を發  
表する<sup>9</sup>。

1925(大正 14)年、男子師範附属小学校(現  
岐阜市立加納小学校)へ転任。世間では、小  
林多喜二『蟹工船』、徳永直『太陽のない街』  
が世評を高めた時代である。川口は、この附  
属小でも綴方主任。師範同期の野村は、その  
前年 1924 年に岐阜女子師範附属小学校か  
ら「児童の村小学校」で仕事をするため上京  
している。野村の他に、小砂丘忠義、峰地光  
重、小林かねよ、上田庄三郎等「児童の村小  
学校」の教師は、子どもの綴方を集めた『鑑  
賞文選』を發行していたが、その親雑誌とし  
て『綴方生活』を 1929(昭和 4)年 10 月に刊  
行する。創刊号の巻頭言を引用しておく。

#### 吾等の使命

『綴方生活』は綴方教育の現状にあきた  
らずして生まれた。／いな単に綴方教  
育の一分野のみではない。現代教育の  
全分野において、満たされぬ多くのも  
のを見出すが故に、微力を顧みず敢え  
て出發する。綴方生活は…常に清新發  
刺たる理性と情熱とを以って、斯界の  
革新建設を企図…目指すところの發表  
は、教育生活の新建設にあるが、その手  
段としては、常に綴方教育の事実在即  
せんことを期する。『綴方生活』は 教  
育における「生活」の重要性を主張する。  
<後略>

生活を重視する綴方(=生活綴方教育)へ  
の方向転換の宣言である。野村から送付さ  
れた『綴方生活』創刊号を読んだ川口等は、  
同年 12 月、『綴方生活』主催で開催された  
「新綴方研究講習会」に参加。集まった会員  
は 180 名程。岐阜県からの参加者は 10 名  
程。その内、横山晋、今井誉次郎(共に女子  
師範附属小学校訓導)と川口が研究發表を  
する。他の發表者は、野村芳兵衛、小砂丘忠  
義、峰地光重、村山俊太郎、佐々井秀緒、井  
野川潔等後にわが国の生活綴方教育を支え  
ていく錚々たる面々。川口がこの講習会で  
「研究發表」をしたことは、既に彼が若手生  
活綴方教師として一定の評価を受けていた  
ことを意味する。彼の發表「自己の紛失」は、  
『綴方生活』(第 2 卷、臨刊<新興綴方教育  
講話>1930 年)に掲載されている=正に全国  
デビュー。少し抜粋引用しておく(旧漢字等  
は新字体に直す。下線は引用者)。

今の綴方界で一番大切な事は、教授者  
自身、失った自分呼びかえすことに  
ある…(教師は)子供には「自分を見つめ  
よ」とか「文はその人の姿だ」とか言い  
ながら、御本人は人の眼鏡からばかり  
物を覗いて、自分の紛失には気付かない、  
こうした様相が今日の綴方界に於  
て、珍しくない…<中略>(子どもの綴  
方は)どれもこれも曇らざる童心の現  
れかばかりかどうか、赤はだかの生活  
から生まれた作品ばかりか、どうか。二  
三人の作品ではない自分の学級全体の  
綴方に目を通して、本当に物を言っ  
てもらいたい①…<中略>或人が子供の  
文は彼らの純真な生活の上に咲いた花  
だ光だと如何にも天国に近づいたよう

な事を言っていたので、私は「花と言うよりも綴方は子供の生活の糞だ」…こなれない物はこなれない儘で出て来る。又それによって私共は其の子供の内的活動のようすや、健康さを見て行く事ができる。<中略>花と眺める時人は美しいものを愛するあまり貧しいもの萎んだものを見過ごし易いが、糞と眺める時、私共は貧弱なもの、腹具合の悪いものに対して、より深き注意を喚起される。そこに愛撫があり、親愛の情があるんだと言ったら、其人は「児童の文を冒瀆する」と言って怒ったので、冒瀆するのではない子供の文を生活の糞と見て行くのは子供に対する私の親心②なんだといった…<中略>新しい提唱、新しい思潮、新しい哲学、そんなものが起こる度に我先に嚙りかけることは結構だ。<中略>盛んに発言するもよい。提唱するもよい。…然し小さくとも地に根ざして居るものの強さを自覚しての上だ。噪音の中にありて失われぬ自己を握りしめ③ての上だ。／これが私自分へ対しての警めでもあり、又最近綴方界へ対してのささやかな感想でもある。

以上が、川口の「研究発表」。とりわけ、下線①～③に注目したい。

下線①「二三人の作品ではない自分の学級全体の綴方に目を通して、…物を言ってもらいたい」は、『赤い鳥』に推薦できる優秀な綴方を書く子どもを育てることが生活綴方教育の目的ではない。そうではなくて、自分の学級全ての子どもに綴方が書ける力を育てる。綴方指導では誰一人切り捨てな

いのが生活綴方教師のあるべき姿という言明は、生活綴方教師か否かを見極める上で不可欠な因子、と筆者は考えている。

下線②「綴方は子供の生活の糞だ」「こなれない物はこなれない儘で出て来る。…貧弱なもの、腹具合の悪いものに対して、より深き注意を喚起される。そこに愛撫があり、親愛の情がある」等の言い回しは、現場人ならではの言い方で生活綴方の本質を突いている。「貧弱なもの、腹具合の悪いものに対して、より深き注意を喚起」「子供の文を生活の糞と見て行くのは子供に対する私の親心」という指摘は、『赤い鳥』等の童心主義から脱却せよ」という概念的な警告よりも、何層倍も強く現場教師の腑に落ちるのではないか。

下線③「盛んに発言するもよい…然し小さくとも地に根ざして居るものの強さを自覚し」「噪音の中にありて失われぬ自己を握りしめての上だ」という警めは、子どもの教育に携わるといふ地味な日々の仕事に精出す全ての教師に対する川口からの温かいエールであると同時に、あまり調子に乗りすぎてはいけないという注意、と筆者は受け止めている。教育という仕事自体、直ぐに成果の顕われぬもの。生活綴方を書かせる仕事もその例外ではないということ川口自身も今一度噛みしめ直そうとする宣言、と解釈できる。

この種の発表を、川口だけでなく、地方出身の若い教師たちがこぞって連発したことに、千葉春夫等は、「僕らの方が時代の先駆者のような風があるのが普通だったが、今度の会では、みんな(川口等地方の若手一引用者)がはるかに新しく、ずっと向うへとび出していた」と驚愕を覚えたのではなか

ろうか<sup>10</sup>。なお川口は、「綴方と僕」で、この「新綴方研究講習会」に参加したことの意義を「この時始めて千葉春夫氏や志垣寛氏、小砂丘忠義、峰地光重、佐々井秀緒、田川貞二、村山俊太郎、小林かねよ等々の諸氏に会った。…この上京によって…ジツとして居るられない程の衝撃を受けた。帰ってから綴方を真面目に考え直してみた。そして綴方に対する自分の立場の転回を記念する意味で寶文館から『生活共感の綴方』(ママ)を出版」と記している<sup>11</sup>。

川口は、翌1930年『綴方生活』に寄せた随筆「綴方閑談その他」で先の研究発表で言った「綴方は子供の生活の糞」と関連づけて次のように述べている(下線—引用者)<sup>12</sup>。

私の組の児童は綴方が一番好きですと自慢そうに話す綴方主任がある。それぞれの個性によって、それぞれの好悪を有している児童を、悉く綴方を一番好きにするなんて、バカな教育があるろうか①。<中略>真剣に綴れとか、生活を凝視せよとか、今の綴方はやたらに児童をいきませすぎる。しかも変な食物ばかり食べさせておいて、運動を禁じた上、糞ばかり立派なヤツをこかせよう②と言うのだから、児童こそ難儀な話さ。

下線部①は、自称綴方教師が陥りやすい落とし穴への警告。事実、川口自身もこの落とし穴に落ちていた。大和小学校で綴方主任として綴方の研究授業をやり、『岐阜県教育』に論文を発表し、学級では『芽生』という綴方文集を発行して、子どもから「先生次の『芽生』はいつ出ますか」と催促される「綴

方のうまい先生」ということで舞い上がってしまっていた自分に気づき愕然とする。如何に自分は、生活綴方教師として子どもを難儀な目に合わせていたかという自省の念が、下線部②である。筆者のこの解釈は、『生活共感綴方指導の新路』の次のような結びの言葉に根拠がある(下線—引用者)<sup>13</sup>。

綴方を特殊の綴方作業とせず、赤はだかの生活を表現することによって、自分を眺めて行く仕事をする事…それは児童にとって何処までも続く無限生活の道であると共に、私(=教師)にとっても本当の意味で児童の生活に触れ、児童を正しく導いてゆく道である。／それには何よりも先ず児童の心を解放せよ、ことばを解放せよ。私の生活を解放せよ。／私の頭を解放せよ。／そして生活共感の綴方へ／生命融合の綴方へ／閑文字文芸を棄てて、生活意識の綴方へ／私は茲に始めて綴方の正しい姿を見たような気がした。／行くべき道を発見したような気がした。

下線部「閑文字文芸を棄てて」とは、彼の言葉を引けば<sup>14</sup>、

大和小学校時代「童謡をつくる／童話をつくる／この歌はうまい／この文は上手だ」とただ「無反省な惰性的な仕事をしていくことによって、児童の生命を進展させていくものと思っていた」  
「私のおろかしい夢が覚める時が来た。」「綴方という因習的な概念に囚れて、真に児童の生命へ種子を下ろし、生活に根ざした文の指導をする事を忘れ

て、文の巧い子をつくろうとしていた事の、如何に無駄なことであったかをしみじみと覚る時が来た。」

ということである。彼は同書の別の箇所  
で、次のように記している<sup>15</sup>。

生活指導を、単に個人的な生活観照  
にのみ終わらしめず、周囲に対する批  
判、社会に対する批判の態度を養い、正  
しい労働を敬愛し、合理に服し、不正を  
識別する目を養い、よき自分を作ると  
共によき周囲をつくる態度を養成する  
ことである。

ここには、綴方が生活綴方であることの  
エッセンスが要約されている。つまり、個人  
的な生活観照に止まらず、周囲(自分の身の  
周り)に対して批判する態度、さらには社会  
に対して批判する態度を養うこと、別言す  
れば、正しい労働を敬愛する眼、合理と不  
合理を識別する眼を養うこと、かくして自  
分をつくと共に良き周囲をつくる力を養成  
することが、生活綴方の仕事、という川口の  
定義である。

また同年、川口は論文「綴方に於ける生活  
表現の意味」で、周囲や社会に対する「批判」  
という場合、その批判が、「赤はだかの生活  
を表現」する言葉でなされているか、「綴方  
は形式美の指導ではない。生活に即した心  
の指導であると口では称しながら、やつぱ  
り巧緻的な言葉のみを価値視して、子供の  
生活から生まれる素朴な、粗削りな、内容と  
表現を無視していた」のではないか。「生活  
の表現ということに対して、概念的な理解  
にとどまって、具体的な事実としては理解さ

れていなかった」のではないかと反省して  
いる。「環境批判、社会批判の上に立つべき  
という叫びについて、教育が時代的責務か  
ら免れた閑人的な仕事でなく、時代に奉仕  
し、更によりよき時代を形成する機運を醸  
成していく勇敢なるべき仕事である以上、  
私はこの叫びに深い共感を持つ者であるが、  
茲に反省を要することは、飽くまでも児童  
の真実な生活表現の上に立つべきである。」  
この反省は、実践家川口ならではの生活綴  
方観として注目に値する。「赤はだかの生活  
を表現」「児童の真実な生活表現の上に立つ」  
という記述は、哲学者飯田隆が言うソクラ  
テスの対話に通底する。即ち、「哲学の一番  
根底にあるものは、日常の言葉、すなわち、  
台所の言葉で営まれる生活の中から出て来  
る疑問であったり、迷いであろう。そして、  
ソクラテスこそ、こうした哲学の根底から  
決して離れなかったひと」に通じる<sup>16</sup>。

そして、この年の8月岐阜市で開催され  
た「新興綴方講習会」で、川口は執行副委員  
長として会をリードし、北海道から九州ま  
で全国からの参加者が800名を超える会を  
成功させる。この会には特別講師として、野  
村芳兵衛、志垣寛、小砂丘忠治、千葉春夫、  
上田庄三郎、小林かねよ等が講演する。川口  
は、執行副委員長として裏方に徹し東京か  
らの特別講師陣や村山俊太郎、佐々木秀緒  
等との絆を一層強化しながら全国デビュー  
を実質化している。この頃の綴方教育を川  
口は、「(鈴木)三重吉の直面叙写はもう過去  
のものとして、如何にして生活させるかと  
いう生活綴方の方向(新時代)へ、急速に傾い  
ていった」とハッキリと「生活綴方(新時代)」  
への転換と表記している<sup>17</sup>。川口が生活綴方  
教師としての立ち位置を確立した証拠と言

える。

なお、この大会では、「新興」綴方講習会、「執行委員長」「書記長」等の用語、それに講師陣小砂丘、上田等を見た県学務課は、警戒感を強め会場に刑事(特高)を張り込ませる。川口は、師範学校長に呼び出され「師範学校は、教生の指導をするところ、教生指導に専念するように」と訓告を受ける。執行委員長の横山晋は、僻地の校長へと左遷され、書記長今井も特高に付きまといわれ、左遷されそうになる。このような措置に憤慨した今井は、辞表を叩きつけ東京の「児童の村小学校」へ出ていく。岐阜県のいわゆる「綴方教師左遷事件」である<sup>18</sup>。

以上、戸入分校代用教員時代から岐阜県師範学校、徳山小学校、大和小学校時代の①から③の助走期間を経て、『綴方生活』主催で開催された「新綴方研究講習会」で彼は「自己の紛失」を発表、翌年の『綴方生活』臨刊号に「自己の紛失」が再録され全国デビューを果たす。先に考察したように発表内容の①～③で生活綴方教師の地位を確立し、『綴方生活』第2巻第1号に寄せた随筆「綴方閑談その他」で、「綴方は子供の生活の糞」と観る生活綴方観を提起。さらに、同年に出版した処女作『生活共感綴方指導の新路』の結びの言葉、「生活指導を、単に個人的な生活観照にのみ終わらしめず、周囲に対する批判、社会に対する批判の態度を養い…よき自分を作ると共によき周囲をつくる態度を養成する」で、生活綴方教師としての立ち位置を確立する。

しかも、「環境批判、社会批判の上に立つべき」という叫びについて、私はこの叫びに深い共感を持つ者であるが、茲に反省を要することは、飽くまでも児童の真実な生活

表現の上に立つべきである」として、知識人の言葉の受け売りのような「概念的な批判ではダメ」というこの反省は—「概念くだけき」に通底する考え方—として注目に値する。さらに、この年の8月岐阜市で開催された「新興綴方講習会」では裏方に徹しながら全国区レベルの生活綴方教師群像との絆を一層強固なものにすることで実質的な全国デビューを具現していった、とまとめることができる。

## II. 「北方性」綴方教育批判

川口は、自称綴方教師が「生活と綴ることの遊離に気づかず、話すことと綴ることとの分離を怪しまず」に「皆さん、きちんと膝に手を置いて、真直に先生の方を見るのですよ」と号令をかけるような綴方を書かせておいて、口先だけは「綴方は生活の表現…綴方は子供の生命の躍動したもの」と叫ぶ者に反発して著したのが、『生活開発の綴方教育』(1933)。彼が本書で主張したかったことは次の点である<sup>19</sup>。

我が前にある子どもの現在の生活を足場とせずして…生活表現は徒に空唸りして今日におよんだ。／概念的な標望からさめて、生活表現を凝視せよ。これが私の希求するところ…/ことばは生活から生まれる…国語の統一と言う美名のもとに、綴方に於て標準語を不当に強調することが、如何に子供の純真素朴の表現を妨げていることか。／嘗て話方の劣等生と目されていた子供が、解放された場所に於いて、解放されたことばによっていかに雄弁に自分の



生活を語る事実に遇して、…深い反省の感に打たれた…「角を矯めて牛を殺すの愚」をやめよう…

以上「ことばは生活から生まれる」を出発点にする川口の生活綴方指導の基本方針は、以下の3点である(下線—引用者)<sup>20</sup>。

1) 児童が文を綴るといふ事は、単にひとりたのしむ風な個人的な行動ではない。何ものかにもものを語る、或は事を報せる…この社会的な行動…よりよき生活内容を、よりよき透徹の文へ導く…

2) 全的に児童の生活を解放して、綴方を全体としての児童の意識生活の具体的な反映たらしめたい。

3) 生活指導を単に個人的な、生活観照のみに終わらしめず、行動的な、社会的な生活態度を養い、正しき労働を敬愛し、合理に服し、不正を識別する目を養い、よき自分を作ると共によき周囲をつくる態度を養成するように。

以上の3点は、1)と3)の下線分からもわかるように、前章の「生活指導を、単に個人的な生活観照にのみ終わらしめず、周囲に対する批判、社会に対する批判の態度を養い…よき自分を作ると共によき周囲をつくる態度を養成する」と一貫している。これこそ、彼が目指した生活綴方教育。そして、先に触れたソクラテスの「台所の対話」である。これなら、全員がカタカナ、ひらがなが書けるようになる1年生の2学期頃から、次のような仕方です「綴方の時間」へ入ることができる<sup>21</sup>。

あ)「話方」が特設されている学校児童の経験の自由発表を速記して児童に示し、／「ホラこれが誰さんの今のお話だ。」／と読んでやって、／「どうだ皆がひとつ此処で話す事を書いてくれなにか。先生は皆の話を今日はうちで聞こうと思うのだ。」とでも言えば、児童は面白がって喜んで文を書くであろう。そこで次の時間にでも「さあ誰のお話しが面白いだろうか。」などと一々読んでやれば、児童は「もっといいものを書くから書かせて書かせて」と強請するに至るであろう。

い)「話方」が特設されていなければ、「対話法」によって経験を順序に話させ、板書でもしてやれば児童は容易に文というものを会得する事が出来る。教 □さんは今朝ひとりで起きましたか。／児 あたし、ねぼうして起こされました。／教 誰に起こされたの／児 お母さんに／教 おきてからどうしました／児 顔を洗って御飯を食べました。／教 それから／児 かばんをかけて学校へ来ました。／教 ひとりで／児 道で栄子さんに会って一緒に来ました。／こうして、話す事を口で言う通りに字で書けば、それが綴方だと云う事を知らせ、誰でも容易に書けると云う心を起こさせる。

と、非常に平易な説明をしている。このような調子で、本書では尋常1年生から高等科まで各学年毎の生活綴方指導法がまとめられている<sup>22</sup>。

もう一つ注目すべきは、当時の綴方が、『『本当にしんみりさせられました。』とか

『先生は思わず涙ぐましい心持になりました』とか言う評が、如何に其の文の優れて居るかの最高をあらわす」という風潮が広まり、「其の結果、児童の生活の中にある科学的な生活の表現は、意識的に阻止され、若しくは無意識的に拒絶される」傾向が強くなっていることに対する警告である<sup>23</sup>。彼は別の論文で、上に引用した「児童の生活の中にある科学的な生活」を次のように説明している<sup>24</sup>。

科学的な態度は必ずしも主情的なものとの互いに悪み合う立場にあるものではない。むしろ、感情を清新にし、健康にし、正しく統整して、よりよき感情へ進める為に役立つ。…／農村の児童が農村風景を書こうとする場合、これまでの主情的な文は、ものの実相をハッキリと究明せず、…センチメンタルな反省のない郷土愛から、盲目的な郷土愛の声をあげた。しかし事実としては現在の農村は、それ自体によって育み進めて来た郷土特有の統一した文化を破壊され、或いはされつつある。科学的態度はこうした実相を実相のままに正しく視させる。そして正しい批判の立場に立たせる。こうした態度は…感情を正しく進める為にも必要であり、文の迫真性を増す為にも大切である。

1934(昭和7)年当時、既に農村の伝統的文化は破壊されたり、破壊されつつあると観ていた川口の観方が「科学的」に自分が住んでいる社会を見る眼を鍛えることを子どもに要求していたことは、注目に値する。この時川口は、「科学的」な観方から得たものを

「ことばは生活からうまれる」という形で子どもが綴っていくことが、真の「生活綴方教育」であるという認識に立っている。即ち、この視点を確認せずに子どもに「科学的な調べる綴方」を書かせると、その綴方が概念的な綴方に陥ってしまい、その結果この種の綴方を書くことができるのは所謂優等生だけになってしまうという落とし穴に川口は気付いていたのである。当時多くの「調べる綴方」「科学的な綴方」がこの種の欠陥に陥っていたことを平野婦美子も嘆いている。平野(1939)『綴る生活の指導法』で、指摘されていことを少し挙げておこう(下線一引用者)<sup>25</sup>。

- (1)今まで色々な綴方論などよみもし、自分も少しばかり書いたりもしたが、私達がそういう誌上であげつらっている理論の足場は、いつもある特殊の子供以上に浮かびあがっていた。どれもこれもどっしりと学級児童の最下層に腰をおろしてはいなかった(p.15)。綴らせるにも読ませるにも…最も困難な指導の土台はぬきにして、あれこれと目に見える上面だけを問題にしていた。
- (2)「調べる綴方」や「科学的綴方」(も)子供自身の必要や興味によらず、又は学級とか学校の組織の中に生きて行われなかった。我こそその指導を成就しようとした教師の名誉心に毒されて、指導者本位になった(PP.57-58)。
- (3)より高い文化を要求している児童と、授けたい教師の熾烈なからみ合いこそ、真の教育愛であると私は信ずる。読む生活も、綴る生活も…あらゆる教育の営みはここからスタートする…五十人

の子供達がしっかり手を握り…どんな場合にも、最後の一人をも見捨ててはならないという強い共同意識が組織されたならば、…どんな出来ない子でも、何か学級社会に裨益するところを持つ、学級には無くてはならぬ一細胞という自覚と働きを持ち、生き生きと学校生活を楽しみ、常に新しい文化を身につけて行く喜びに輝く学級空気をかもす事(PP85-86)。

(4)(話し合い)の訓練で人の意見に対して、「そうですよ」「僕はちがいます。なぜって……ですから」「そうかもしれません」「そうそう、そして……」と自分の考えを明確に伝えられるようにさせたい…単に国語の時間ばかりでなく、あらゆる接触時間に於いて…この態度が出来ると…わからない箇所があれば、「先生、僕そこがわからないからもう一度行って下さい」というようになる(PP.106-107)

上記(1)~(4)―とりわけ下線部―は、川口の「生活綴方」観と重なっていることは明らかである。川口の全国デビューが実質的に強化されている証といえる。全国デビューとは、中央へ進出するとか、全国紙に論文が掲載されるという表面的な事象を超えて、「生活綴方教育」観の内実において全国区的生活綴方教師と同質・同等になる、ということだからである。ありのままを発言する、綴るといふことの延長線上で、わからない時には「先生、僕そこがわからないからもう一度行ってください」と教師に要求することができたという事実の確認は、貴重である。こんなに早い時代から、しかも小学校に

も軍国主義的圧力が益々強化されつつあったこの時に、このような「学習権」の要求までが実現されていたという事実を確認できるからである。さらに加筆すれば、当時の東井義雄の実践で、小学校4年生まで自分の名前すら書けない劣等生と見なされていた「モリタミツ」に文字をわからせた事例を挙げることができる<sup>26</sup>。

話を川口の系統的な綴方指導に戻して、別なもの＝「尋四綴方指導について新学年の感想」から尋常4年生の生活綴方指導例を挙げておこう<sup>27</sup>。

4年生になったら、次第に表面的なひろがりの世界よりも、生活の内面的な自覚へ誘導し、そこに新鮮な文の味と新しい方面とを見出させるようにしたい。…平凡な生活の中に、これまで見過ごしてきたありふれたことがらの中に、面白味を見出させるようにしたいと思う。誰もが見受けるような街上風景を、誰もが体験しているような交友の関係を、誰もが見捨てていたような周囲の草木虫魚を、新しく振り返って、しみじみと眺め直して見、そこにこれまで気づかなかった味を見出させ、意味を発見させる…この学年頃になれば創作意欲の発展より見ても、外に向いていた眼が次第に内へも向けられて…批判的な気持ちの動いたものが現れてくる。

4年生ぐらいになると、子どもは批判的な心情の動き―それには先述の「科学的な観方」が土台になっている―も書き綴るようになるという子ども把握を川口がしていたことがわかる。なお、ここに引用した川口論

文が掲載されている『綴方生活』第3巻4月号(1931)は、「新しき綴方経営案」の特集号で「綴方指導の出発とその計画」が中心記事。尋常1年から6年までの川口以外の執筆陣は、今井誉次郎、横山晋、野村芳兵衛、南砂雄、峰地光重である。尋5の南砂雄は、本名田川貞二で三重県の若き生活綴方教師。田川は、小砂丘と共に『綴方生活』の編集を主導し、出資もした人である。

『綴方生活』第7巻3月号(1935)には、鈴木道太「綴り方に於ける北方性の問題」とそれに対する川口「指導理論として綴方の北方性なるものありや—鈴木氏の綴り方指導精神とそのサンプル作品の検討—」という興味深い論争が掲載されている<sup>28</sup>。鈴木の本主張点と川口の評価・批判点を対照的に整理したのが次ページの対照表1である。

この対照表1で鈴木が、「公式的『調べる綴方』の終焉は、調べる目的を子どもの問題にのみ限定して、『社会人としての教師の問題』にしなかった点にあるとの指摘に対して、川口が鈴木「北方性の提唱は…人間の生き方の問題として世界観の問題に連なる」と「満腔の賛意を表している」ことは、先の川口の「当時、既に農村の伝統的文化は破壊されたり、ないしは破壊されつつある。」だから子どもに「科学的」に自分が住んでいる社会を見る眼を鍛えることを要求していたことと一貫している。また、前章の「環境批判、社会批判の上に立つべきという叫びについて、教育が時代的責務から免れた閑人的な仕事でなく」とも通底している。

川口は、1936(昭和11)年、揖斐郡小島小学校(現揖斐川町立小島小学校)校長になる。この年から彼は、『綴方生活』の編輯同人にも名を連ね、岐阜県の若い綴方教師に題材を

とった随筆「明暗微苦笑図」を10回にわたって連載し、『綴方生活』の中にも確固たる位置を占めていく。その他注目すべきものは、新卒教師に宛てた「新卒業生諸君を迎えて—この地の綴方情勢を語る」(『綴方生活』第9巻、5月号)がある。そこで、彼は次のように記している(下線—引用者)<sup>29</sup>。

先生嘆じて「どうも僕んとこの組は……」なんて言うが、大抵は組が悪いじゃなくて、先生御自身のお仕事の方に考えなおして見なければならん事が多いようだ。綴方を語るなら先ず自分の組の作品を語るがよい、綴方を研究するなら、先ず本を読むよりも何よりも、自分の組の作品を読んで真面目に考えて見ることが大切…綴り方の進展はそこから始まる。…研究授業(で)選ばれた作品は組としての佳作品で、発表する子供は幾人かの選手…になり易い。…いともあざやかに授業は進行するが、大勢の子供は…浮かん顔して行儀よく並んでいるにすぎない。…綴方の指導全体がそうした上澄みだけをきれいにするのであってはならない…なるべく全体が流れ、動き、かきまわしてもそれほどゴミクタが浮かんで来ないように底をさらうことに努める…綴方を本当に指導しようとするなら、先ず第一に底の泥さらいに手をつける事だ。…綴方の本態は「生活を文章に表す技術の錬磨」…自分に対しては「真実を書く」こと…他人に対しては「わからせる」こと…こうした本来の目的を自覚して、これに実践の熱意を示すならば、綴方は中途半端な煮え切らぬ足踏みをい

表 1 鈴木道太と川口半平の綴方論対照表

<p>I. 「地方性の解明」</p> <p>a) (地方は生産文化、都市は消費文化と規定し)生産の文化は、素朴で野生に満ち、遅い生活意欲に充ちている。農村児童は、「自分のなやみ」の文に見るように一個の労働成員として、現実には社会的な生活関係に部署を持つ。</p> <p>b) 消費文化は、技巧的で浮薄で華美であり、都市児童は、「独立」の文に見るように父親の労働に寄生する寄生虫的存在。</p> <p>II. 「北方性と南方性の比較」</p> <p>南方地方は、気候温暖で恵まれた耕作地があり西欧の商品経済によって、既に生産力は著しく発展。自由主義教育の苗木(奈良)あるいは作業(主義)教育に於て、教育に近代工業としての印刷機・電気モーターの作業場、温室等の諸施設を為し得たのも南方地。対して、絶えず天候の脅威を感じ、生産様式は、封建的で、分業は完全に行われず、手工業は未だ駆逐されていない。この種の<u>厳しい自然条件と封建遺制が色濃く残った経済・産業の未発達という二つの極端の下に呻吟して、暗黒の中に、光を求めている。</u></p> <p>III. 「北方文化の性格と反省」</p> <p>石坂洋二郎等は決して南方的マンネリズムを掲げない。石坂「馬骨図始末書」は、<u>踏んでも蹴られても立ち上がる、雑草のような強い生活意欲を根底にし、北方的な野生・北方的な愚鈍・世帯人情を映している。それは決して消費的な観念的敗北性を持っていない。</u></p> <table border="0" data-bbox="300 1182 742 1305"> <tr> <td></td> <td>汽笛</td> <td>(五年児童)</td> </tr> <tr> <td>あの汽笛</td> <td></td> <td>もう</td> </tr> <tr> <td>田圃に</td> <td></td> <td>あばがかえるよ</td> </tr> <tr> <td>聞こえただろう</td> <td></td> <td>八重蔵泣くなよ</td> </tr> </table> <p>北方地帯が生んだこの愛情の詩は、決して単なるセンチメンタルではない。<u>生活の深い陰影の中で取り上げた、愛憐の迫力であり意欲のロマンチズムだ。単なる感傷的詠嘆は我が北方のくみし得ざる彼方のもの。我が北方の地帯が、南方文化に追随することで、日本の全文化の発展に貢献するのではない。月夜の馬小屋の詩に示される野生の愛情こそ、我が北方のもの。この愛情が示す意欲の行手こそ、我々のあるべき世界。心なくも我々は今まで、「道が光るよ」「葉がゆれるよ」等々の南方的性格に追従していたことを反省せねばならぬ。</u></p> <p>IV. 「生活意欲の問題」</p> <p>「生活意欲性」こそ北方的性格の基本。意欲なき性格は、生き方の敗北を示すのが、北方地帯。<u>生活意欲とは、生活を前進させる迫力の謂い。この前進性は、生き方として、まず教師の問題。何時、いかなる時代でも、子供の問題は、社会人としての教師の問題。公式的「調べる綴方」の終焉は、調べる目的を子どもの問題にのみ限定して、教師の生き方を含ませぬ所にはなかったか。北方は立ち上がらねばならぬ。立ち上がらねば死ぬ所まで追いつめられて来た。そこに北方の此上なく強い場がある。</u></p>		汽笛	(五年児童)	あの汽笛		もう	田圃に		あばがかえるよ	聞こえただろう		八重蔵泣くなよ	<p>都市と対比しての地方性が、対照的な姿に於て明確に区分されている——この点は(私も)認める。しかし(サンプル)「自分のなやみ」の「勉強をやりうと思っても、家の仕事がいそがしくてやれない」は(全国の)村落に於ける共通性であって、<u>北方児童に特有的な境遇ではない。</u></p> <p>生活様式の特異性を地理的、文化的に説明して、北方性を鮮明化。が、<u>南方性を、生活を前進させる迫力のない、根底に於て消費に立つものとし、これを都市性の範疇に入れ、南方性的性格に追従していくことの反省を警告しているに過ぎぬ。都市性と地方性との対比で示した鋭利な批判解剖のメスは、南方性の吟味で、あまりに観念的な刃こぼれを示す。地方性という点では兄弟分である…南方地方をも、北方性なる名のもとに、対照的な見地から敵としてのみ迎え、恰も「みなみ風ふく楽土」でもあるかの如き観念的錯覚をよび起こした感がある。</u></p> <p>彼は、地方性を地方色と区別し、地方性の醸し出す陰影として地方色を眺め、地方性を牧歌的世界観によって把握したものが「土の綴方」と見た。この土の生活の動相に目をふさいだ、<u>単なる田園詩としての綴方を敗北の歌として、揚棄し、意欲的な前進的な綴方を叫んでいることは、その限りで賛同。／彼の北方性は、北方地方の「地方性」と「生活意欲性」とを必然的に包括したものだ、それは都市性とこそ対照的なすがたに於て立つべきもの。これを「地方性」と呼ばず「北方性」と呼び、東北地方の村落こそ、この都市性に対比する地方性の最も明確な地方で、「生活意欲性」の宣揚を最も必要とするものと痛感した…今東北の農村は窮乏のドン底。だがそれは主として農村に於る姿ではないか。東北地方でも都市はあまり他の地方と変わらないはず。都市性としての共通性は「消費文化」として、窮乏東北地方の中でも…存在していよう。南方の村落が、<u>北方と対比されるほど幸福か。どの地方でも、農民が歴史を通じて幸福な時代があったか。昂揚すべき「生活意欲性」の方向では北方も南方も同じはず。</u></u></p> <p>東北地方が天下の視聴を集めている時、東北綴方人が「綴方の北方性」を共同提唱したことは、意義がある。が、<u>地域的に南方地方性と対比するものとするれば見当違いで「都市性」に対する「村落性」の為第一線に闘うものとして肯定されるべきもの。この点で、鈴木「北方性の提唱は、単に偏狭な地域的問題を取り上げての怒号ではない。…リアリズムの問題に関して、現実的な地方文化の宣揚であり、人間(教師も児童も全ての社会人も)の生き方の問題として世界観の問題に連なる」との宣言に大賛成。</u></p>
	汽笛	(五年児童)											
あの汽笛		もう											
田圃に		あばがかえるよ											
聞こえただろう		八重蔵泣くなよ											

つまでも続けていることから少しは免れ得るであろう。…底面指導は、少数の児童について走るのではなくて、級全体を対象として少しづつでも成績を上げてゆく、級全面に亘っての指導、…目のあらい網で大きい魚をすくう仕事ではなくて、目の細かい網で出来たら目高までもすくう…仕事(だ)。

このように、初期『綴方生活』に掲載された諸論文以降彼の生活綴方観は、校長になってから後も少数のエリートの子どものための綴方ではなく、学級全体の子ども大衆のための一とりわけ周辺部の子どもにこそ丁寧に目配りした一綴方指導が生活綴方教育の基本と一貫している。先に触れた平野や東井の生活綴方観とも同質であることがわかる。川口はまた、小島小学校長時代の1937-38(昭和 12-13)年に「綴方教育史概説」と題して10回程『岐阜県教育』に連載をしている—これを戦後県教育長退職後まとめ直して出版したのが『作文教育変遷史』<sup>30</sup>である。

その後、川口は1938(昭和 13)年9月から県視学になり、仕事の重点は教育行政面に替わる。1943(昭和 18)年、彼は岐阜市立長良国民学校長になる。敗戦を機に辞職するつもりであったが、県の学務課に引き留められ翌年1946(昭和 21)年3月、後任の校長職を野村芳兵衛に託して49歳で教職を辞する。敗戦後辞職するまでの約半年間、彼は県教育の民主化策でも中心的役割を果たす。一例だけ挙げておく。長良国民学校小国民文化部は、県下小学校に「岐阜県小国民文化研究会」の案内を1945(昭和 20)年12月20日付で配布。会長は川口。以下が、案内文の

呼びかけである<sup>31</sup>。

結成の趣旨：これは子供たちの心の畠に、正しい情操の涵養と純化の鋏を入れようとする一つの企て…新日本の子供たちを明るくそして健全な生活へ導こうとする一つの努力…新日本の教育の為にも、研究と反省と要請とに真剣にならざるを得ません。／…正しい情操の涵養を目ざして居りますが、もっと真剣な学習、もっと身についた科学、もっと楽しい生産生活、もっと生々した正しい遊びの為の、「教育」ならざる教育の場としての「小国民文化」を考えたい…<後略>

(月報「岐阜新児童文化連盟」昭和 21 年 1 月 第 1 号で川口は)

私はこの運動を私共のたのしい仕事として始めたいと思っている。／私が理論よりも先ず実践—というのは、理論を軽視するのではなく、理論が先行しすぎると、とにかく仕事が窮屈になって、所謂理論だおれに陥り易いと思うから…人の仕事は批判し易いが、実際に仕事をする事は、なかなか口先だけでやれることではない。／私はこの仲間の人たちが、先ず常識によってどしどし仕事に手をつけてほしいと思う。それからよいものにしだいに脱皮してゆけばよい…<後略>

ここにも川口の「理論よりも先ず実践」という現場人の変わらぬ楽天性と、バランス感覚の卓越性を垣間見ることができる。「先ず常識によってどしどし仕事に手をつけてほしい」という文言を以て、川口は「プラグ

マテイスト」というラベリングを筆者はしない<sup>32</sup>。川口が言う「先ず常識によってどしどし仕事に手をつけてほしい」は「ことばは生活から生まれる」という彼の生活綴方観、これからの帰結としての「理論が先行しすぎると、とにかく仕事が窮屈になって、所謂理論だおれに陥り易い」という経験知であることが本稿で確認できたからである。そして、岐阜師範女子部附属国民学校を会場に1946(昭和21)年2月16・17両日に亘って、第一回「新教育を語り合う会」が開催される。川口会長の挨拶の後、教育理念の問題／教師論／教育実践／教育行政制度／教育と社会(校外教育実践)／その他の6分科会に分かれて真剣な話し合いが為されている。狭く学校教育に限定せず、社会教育まで視野に入れているところにも川口の特徴がよく出ている。

1946(昭和21)年3月長良国民学校の校長職を野村芳兵衛に託し、49歳で教職を辞す。その後郷里徳山村の村長、県会議員、県教育長を歴任する。その間、川口が行った生活綴方教育に係る全国区的な仕事の主なものを、最後に列挙しておく。

- ①野村芳兵衛と協力して岐阜県多治見市の廿原分校に生活綴方の大先輩峰地光重を助教諭として迎え入れ、峰地に最後の生活綴方的教育の実践の場を提供している。峰地はこの廿原分校での実践をまとめた『はらっぱ教室』(1952)を百合出版から出版する。なおこの出版には、今井誉次郎が百合出版を紹介している<sup>33</sup>。
- ②岐阜県中津川市で開催された第一回作文教育全国協議会(今井誉次郎会長)は全国から1300名に上る参加者を集め、東京からの講師陣は大田堯、矢川徳光、勝田守一

等錚々たる陣容。大会開催にあたって川口は、県教育長として「作文教育の盛んなる時こそ、本当の教育が行われる時である。作文教育がダメになる時は、教育がこのましからぬ方向に進む危機の時である」と挨拶して、会員一同を感激させる<sup>34</sup>。

## おわりに

以上の考察の結果、以下の3点が明らかになったことを時代的背景も視野に入れながらまとめておく。

- (1)川口半平が大和小学校で綴方主任になった時、綴方教育はちょうど担当学級の代表選手としての子どもの綴方を鈴木三重吉が選定して編集した『赤い鳥』から、学級の全ての子どもに綴方を書く力をつけていこうという方向への転換が始まる時期。これを象徴するのが、川口の同窓・同期である野村芳兵衛等が刊行した『綴方生活』。創刊号に掲載された「宣言」、つまり「単に綴方教育の一分野のみではない。現代教育の全分野において、満たされぬ多くのもを見出すが故に、微力を顧みず敢えて出発する。…『綴方生活』は教育における『生活』の重要性を主張する。」という「生活綴方」への方向転換。この『綴方生活』同人が主宰した「新綴方研究講習会」で川口は「自己の紛失」発表。その要旨は、一握りのエリートではない子ども大衆の「赤はだかの生活から生まれた作品」である綴方を「綴方は子供の生活の糞」と観る「生活綴方」観。処女作『生活共感綴方指導の新路』で川口は、「生活指導を、単に個人的な生活観照にのみ終わらしめず、周囲に対する批判、社会に対する批判の態度を養い、正しい労働を敬愛し、合理

に服し、不正を識別する目を養い、よき自分を作ると共によき周囲をつくる態度を養成することである。」と規定して、生活綴方教師としての立ち位置を確立。彼の立ち位置は、ほぼ同時期に生活綴方教育を実践していた平野『綴る生活の指導法』の以下の記述と重なっている。ア)今までの綴方教師の足場は、どっしりと学級児童の最下層に腰をおろしておらず、最も困難な指導の土台はぬきにして、あれこれと目に見える上面だけを問題にしていた。イ)「調べる綴方」や「科学的綴方」は子供自身の必要や興味によらず、教師の名誉心に毒されて、指導者本位になっていた。ウ)読む生活も、綴る生活も…あらゆる教育の営みは五十人の子供達がしっかり手を握り、最後の一人をも見捨ててはならないという強い共同意識を組織することを目指す、と重なっている。

(2)第2に注目すべきは、川口『生活開発と綴方教育』で、当時の綴方が「『本当にしんみりさせられました』とか『先生は思わず涙ぐましい心持になりました』とか言う評が、如何に其の文の優れて居るかの最高をあらわす」という風潮が広まり、「其の結果、児童の生活の中にある科学的な生活の表現は、意識的に阻止され、若しくは無意識的に拒絶される」傾向が強くなっていることに対する警告。そして、「児童の科学的な態度は必ずしも主情的なもの互いに悪み合う立場にあるものではない。」(むしろ)「感情を清新にし、健康にし、正しく統整して、よりよき感情へ進める為に役立つ。…農村の児童が農村風景を書こうとする場合、これまでの主情的な文は、ものの実相をハッキリと究明せず、…センチメンタルな反省のない郷土愛から、盲目的な郷土愛の声をあ

げた。しかし事実としては現在の農村は、それ自体によって育み進めて来た郷土特有の統一した文化を破壊され、或いはされつつある。科学的態度はこうした実相を実相のままに正しく視させる。そして正しい批判の立場に立たせる。」これこそが「批判的な観方」でありこうした態度は、「感情を正しく進める為にも必要であり、文の迫真性を増す為にも大切である」という指摘は、戦前の東井義雄の生活綴方観にも通底している。

(3)最後の一つは、川口が北方性綴方に関して鈴木との論争で指摘していること。即ち、鈴木が、「公式的『調べる綴方』の終焉は、調べる目的を子どもの問題にのみ限定して、『社会人としての教師の問題』にしなかった点にあるとの指摘に対して、川口が鈴木「北方性の提唱は…人間の生き方の問題として世界観の問題に連なる」と「満腔の賛意を表している」ことは、川口の「1934(昭和7)年当時、既に農村の伝統的文化は破壊されたり、ないしは破壊されつつある」と観ていた川口の観察眼が「科学的」に自分が住んでいる社会を見る眼を鍛えることを子どもに要求していたことと、一貫していることが明らかになった。

#### 【註】

- 1) 川口半平(1930、1933、1963、1967、1974、1975)『生活共感綴方指導の新路』寶文館、『生活開発と綴方教育』厚生閣、『山のコボたち』東都書房、『母は子の心に灯をともす』黎明書房、『花ぐるみ』母と子ども社、『作文教育変遷史』共同企画(岐阜県国語教育研究会、1958年の復刻版)、と『綴方生活』(復刻版刊行委員会、1974年、名古屋大学図書館蔵)等に掲載された諸論



- 文の他、岸武雄(1992)『芳兵衛さと半平さ』教育出版文化協会、高橋弘 (1999、2000、1975)「昭和前期における岐阜県の綴方教育(一)、(二)」(『岐阜聖徳学園大学国語国文学』、第 18 号、19 号)と『岐阜綴方人』に集った同人たち—昭和十年代前半の岐阜県の綴方教育—(『岐阜聖徳学園大学国語国文学』第 20 号)、浮田真弓(2002)「岐阜県の綴方教育研究—川口半平を中心とした考察—」(『桜花学園大学人文学部研究紀要』第 5 号)。
- 2) 前掲『花ぐるみ』、P.201
  - 3) 1950 年に生まれた民間教育団体「日本綴方の会」は 1952 年から「日本作文の会」と名称変更し今井が会長となる(ただし 1952-55 年の間は「作文教育全国協議会」と称した)。
  - 4) 誕生から 1946 年までの川口については、随筆的自伝『花ぐるみ』が一番詳しい。
  - 5) この辺までの事情は、前掲『母は子の心に灯をともし』、『花ぐるみ』に詳しい。
  - 6) 川口(1957)「私の師範時代前後」『生活と文化』121 号、PP.6~7。
  - 7) 川口(1921)「童謡について」(『岐阜県教育』第 326 号)。
  - 8) 前掲『花ぐるみ』、PP.132~139 参照。
  - 9) 川口(1923)「童謡教育」『岐阜県教育』第 350 号。
  - 10) 「講習回顧座談」『綴方生活』第 2 巻、1930 年、4 月号。
  - 11) 川口(1934)「綴方と僕」『綴方生活』第 6 巻 11 月号、P.56。
  - 12) 川口(1930)「綴方閑談その他」『綴方生活』第 2 巻第 1 号、P.49。
  - 13) 前掲『生活共感綴方指導の新路』、PP.46-47。
  - 14) 同上書、PP.43-44。
  - 15) 同上書、P.28。
  - 16) 川口(1930)「綴方に於ける生活表現の意味」『岐阜県教育』第 429 号、PP.10-12。  
飯田隆(2017)『新哲学対話』筑摩書房、P.10 参照。
  - 17) 前掲『花ぐるみ』、PP.200-201 参照。
  - 18) この点については、川口「綴方と僕」(前掲雑誌)P.56、岐阜県教育委員会編(2001)『岐阜県教育史 通史編 近代四』、P.465、前掲高橋「昭和前期における岐阜県の綴方教育(二)」PP.20-30、戸部芳文(1991)『岐阜県教育発達史』大衆書房、PP.245~252、今井誉次郎(1977)「教師生活五十年」『今井誉次郎著作集 5』合同出版、所収)、PP.252-257、佐々井秀緒(1981)『生活綴方生成史』あゆみ出版、PP.322-323.等参照。
  - 19) 前掲『生活開発の綴方教育』、P.3。
  - 20) 同上書、PP.20~23。
  - 21) 同上書、P.62。
  - 22) 同上書、PP.128~137。
  - 23) 同上書、PP.65-67。
  - 24) 川口(1934)「日本精神に立つ綴方教育所感」新綴方教育研究会編『新綴方教育』第 2 巻第 6 号(北海道教育大学附属図書館 釧路館所蔵)、P.7。
  - 25) 平野婦美子(1939)『綴る生活の指導法』厚生閣、なお、平野(1940)『女教師の記録』は出版後 2 年間で 106 版まで増刷されており、彼女は日本の女ペスタロッチと称された。また、同時期の東井義雄も川口や平野と同質の「生活綴方教育」観に立っていた——詳しくは拙著 (2016,2018)『東井義雄の授業づくり 生活綴方的教育方法と ESD』、『東井義雄 子どものつまずき

- は教師のつまずき』いずれも風媒社、参照。
- 26) 拙著『東井義雄の授業づくり 生活綴方的教育方法と ESD』PP.48-54.参照。
  - 27) 川口(1931)「尋四綴方指導について新学年の感想」『綴方生活』第3巻4月号、PP.19-20。
  - 28) なお、鈴木道太「綴り方に於ける北方性の問題」について村山俊太郎は、全面的な賛同を表している(村山士郎(2017)『村山俊太郎 教育思想の形成と理論』本の泉社、PP.168-219) また佐々井(1981)『生活綴方生成史』あゆみ出版、PP.175-179、中内敏夫(1977)『生活綴方成立史研究』明治図書、PP.854-868 も触れている。
  - 29) 川口(1937)「新卒業生諸君を迎えて この地の綴方情勢を語る」『綴方生活』第9巻5月号、PP.12-15。
  - 30) 川口(1975)『作文教育変遷史』復刻版・共同企画出版部、(初版・岐阜県国語研究会、1958年、いずれも岐阜県立図書館所蔵)。
  - 31) 詳しくは岐阜県教育委員会編(2001)『岐阜県教育史 資料編 現代1』、PP.466-479 参照。
  - 32) 詳しくは鶴見俊輔(1959)「大衆の思想」久野収、鶴見俊輔、藤田省三『戦後日本の思想』中央公論社、および前掲拙著『東井義雄の授業づくり 生活綴方的教育方法と ESD』の第二章参照。
  - 33) 峰地の甘原分校での教育実践については、拙著(2014)『はらっぱ教室 峰地光重の生活綴方』風媒社、で詳しく触れている。
  - 34) 詳しくは、前掲『はらっぱ教室 峰地光重の生活綴方』、PP.31-32 参照。また今井

誉次郎は、この研究大会で川口の後で挨拶に立った教科研の勝田守一が「教育学は教育実践の事実から出発すべきだ」ということを強調したことに触れている。前掲今井「教育生活 50 五十年」P.452 参照。